特選

一筋に知足の日々は美わしく

田附町　上田文子

（評）一生けん命頑張って、やっと定年を迎え自分の来し道を振り返る、いろいろあったが今は楽しい思い出ばかり、やり抜いた満足感に浸り幸せな余生に感激をしている。格調の高い一句。

特選

恋しくて夢のあなたに届かぬ掌

愛知郡愛荘町　青木郁子

（評）永年連れ添ったふたりに悲しい別れ、夢でも逢いたい、抱きしめたい、かなわぬ事と知りながら、愛の深さに追いかけ声かければ今宵も閨房の枕をぬらす一筋の涙。

特選

念のため末尾に一語愛の釘

田附町　大谷みつ子

（評）立てば歩めで愛しく育てた子のためなら何をもいとわず憂き身をやつす、親のもとからはなれた身を案じ、真っ直ぐ伸びてほしいと願い、追伸の文字に熱いひと押し、親心を切々と詠まれた。

入選

一筋に天賦の職を得た瞳

東近江市　小林清次郎

（評）この句も振り返っている一句。若い頃から弟子入りして叩き上げ、じっと我慢をして一人前と云われる様になり今では名人級。これを我が天職と云う。

入選

念のため幹事に耳借る花の宴

極楽寺町　古川寛二

（評）祝福の宴を間近に控え万全を期して誠実に望む企画進行者、手落ち間違いがあってはと、今一度幹事との打ち合わせ、光景を描き盛会を願う心の緊張が響いてくる。

入選

恋しくて手繰れば遠き母の膝

新海町　野田惣次郎

（評）泣きたい時泣かせ、優しく慈しみ庇ってくれた母、幾年が過ぎれば過ぎるほど、その存在の偉大さが熱く迫ってくる。作者の亡き母への敬愛の深い万感の情がこもっている。

入選

一筋に決意の夢を掴むまで

新海町　野田美代

（評）この句は目標を決めて頑張っている一句。ひとつの事を極める、なかなか身心共にその気に成る迄大変、苦労の向うにはきっと大きな倖せが待っている。

入選　念のため　検査うながす医者の声

本庄町　田口洋子

（評）元気で長生きをモットーに、健康自慢で通し来た自負過大の今日、時として体調不良の自分を知る為ドックで検診、そこから始める第二の人生の出発点としたいと……。

入選　一筋に　詩歌の小径直進す

長曽根南町　日比野美鈴

（評）句に手を染めその魅力に取りつかれ、心の支えと人生経験を積みながら、今日まで約（つづま）やかに一途に過ぎ来た誇り、素晴らしい人生ドラマの軌跡を詠まれた、句歴を重ねたベテランらしい詩想がくみとれます。

佳作　一筋に　苦労絵に描く深い皺

犬上郡豊郷町　西山肇

佳作　念のため　母の助言が温くい傘

鳥居本町　滝口寿美夫

佳作　恋しくて　春の汀へ積む小石

長浜市　山田静子

佳作　一筋に　凛と建つ城四季に映え

蒲生郡竜王町　松瀬文恵

佳作　恋しくて　待受け画面開き見る

普光寺町　河合仙治

佳作　一筋に　貫く心に嘘はなし

岡町　宮地正子

佳作　恋しくて　帰りたい国ままならず

西今町　松岡晴代

佳作　念のため　過去をぎっしりアルバムに

犬上郡豊郷町　元持きよ子

佳作　一筋に孤高貫く我が生涯（ここうつらぬ　わ　いのち）
蒲生郡竜王町　松瀬竜子

佳作　恋しくて小さな星に母を視る
日夏町　大菅恵美子

佳作　念のため恥は一時聞き直す
鳥居本町　寺村美惠

佳作　一筋に縹（はなだ）の空に雲の峰
城町一丁目　小林真紀子

佳作　恋しくて添え書きを見る古日記
稲里町　覇流不良者

佳作　念のため視点を変えてひと呼吸
稲部町　辻昭子

佳作　一筋に命の糧を農に生く
稲里町　勝見政恵

佳作　恋しくてあれは遠い日夢褪（あ）せず
犬上郡豊郷町　北川乙比古

佳作　念のため後事を託し文残す
後三条町　吉原初美

佳作　一筋に未来を見据え門開く
犬上郡豊郷町　元持和子

佳作　恋しくて若き日の歌口づさむ
新海町　野田ヒサ子

佳作　念のため俺も逝くのか妻に聞く
東沼波町　木原正

佳作　一筋に生きた証しの城がある
正法寺町　金子君子

佳作　恋しくて月見て偲び泣く輝夜
八坂町　飯島白雪

佳作　一筋に写経に入魂筆捌く
古沢町　野洲令子

佳作　恋しくて亡くして知った背の重み
犬上郡豊郷町　西山芳子

佳作
一筋に
技を極める陶芸家
長浜市　野口成人

佳作
恋しくて
川のメダカの掬い合い
地蔵町　佐古徳子

佳作
念のため
友愛訪問笑顔見に
普光寺町　河合淳子

佳作
一筋に
道具になじむ手の厚さ
大藪町　外村輝夫

佳作
恋しくて
母を愬ぶや姫バサミ
長曽根南町　髙　恵三郎

佳作
念のため
確かな道と今一度
田附町　佐々木トミ

《総　評》

今年は出句者数こそ昨年よりも僅かに減りましたが、内容的には発想の素晴らしい秀句が多く、その意欲と情熱に深く敬意を表しますと共に選者としての責任を痛感している次第でございます。

皆さんからご投吟くださった全部の句を事務局のほうで、改めて順不同、無記名にて作成し直され、その真新しい小冊子をもとに、柴田・西村両先生と不肖私の三名で一句一句熟読討議、精魂こめて選考に当たらせていただきました。

さて応募作を通じて感じたことは、相対的に水準も高く鮮度の溢れたものなど、優れたものが多く見受けられる中、類想句も沢山ありました。とくに「恋しくて」では、「母を想う」句がかなりありました。冠題から誰でもがすぐ思い付くような発想で句を付けますと似たような句がいっぱい出てきます。その多くの中から何句も選ぶことは出来ませんので、言葉使いや句としてのまとまりの良い句を代表として選びその他の多くの句は残念ながら選外となってしまいます。

よくご存じの方もいらっしゃると存じますが、冠句は季語・季節等にこだわることなく、自由吟であります。まず冠題を一句（一つの物語）として捉え、角度を変えよく吟味して充分かみしめてから自由自在に解釈し、それにふさわしい事柄や場面を新しく興して、心の中の気持ちや風景の楽しさ、また身の周りで見つけたおもしろいことがらを、ひとつの絵や詩のように、また映像が浮かんでくるように言いあらわし、人の胸に残るような、心打たれるような感動表現で「中七、下五の十二文字」にまとめる短いたのしい心の詩です。只冠題にすぐ接続しない、標語調にならないようにこころがけて、創作心高く深くやさしく、どうぞ句友の皆さん、選外の方も紙ひとえ、めげることなく、来年こそはその出句者数の減少も食い止め、近隣市町交友関係者にもお声を掛けていただき、ひとりでも多くの愛好者の皆様方からご投吟くださるようご協力をお願い申しあげ、拙いペンを置かさせていただきます。

愚考短慮　今井　三日月

選者吟

一筋に　至福の余生恙なく

柴田遊児

恋しくて　ホタルの乱舞遠き日々

西村吟雪

念のため　健康と言うレントゲン

今井三日月